

# 夜学バー日報

(令和二年 一月一九日～四月八日)

二〇二〇年四月二四日発行 国内初の感染者が確認された三日後から緊急事態宣言発令まで81日間の夜営業まとめです。HPに掲載したものに補筆し書き下ろしを加えました。期間中は無休、今後も毎日営業予定。日報も続きます。日付の下は営業担当者名、無記の場合は店主です。「影響」に関する記述は一月二九日から。店主・尾崎昂臣 HP: Entertainment Zone  
夜学バー 一〇〇・〇〇〇五 台東区上野2の4の3 池之端すぎやビル301 [brat.yagaku@gmail.com](mailto:brat.yagaku@gmail.com) HP・Twitter 有  
お支払いや「存在への対価」はゆうちょ銀行・〇一八・〇一八・普通・9577957 (10130-95779571 〒カバ-777)

■一月一九日（日）

初めてお酒を飲んだのがこのお店という二十歳の女性がホットワインをゆっくりゆっくり飲んでた。ゆっくりゆっくり。ぐつとくる。幸福はゆっくり育つが、不幸は急にやってくる、ってなんか小説にあったなあ。

夜中、ある女の子の歯が急に抜けて、場に戦慄が走った。しかし仕方ないのでみんな爆笑した。とにかく写真を撮った。「歯が抜けた！」なんてのは大事件で、たぶん一生の記憶。会うのはまだ二度めくらいだけど、その一瞬すごく仲良しの人のような気がしてしまった。勝手に。だって仲良くない人の歯は抜けないよね？ お大事になさってください。すぐにでも歯医者へ。

■一月二〇日（月） 小津

■一月二一日（火） あすか

■一月二二日（水）

仕事と仕事の合間を縫って「ビールと電気ブランセット」を飲みにくる勇姿。「休職して、その間に転職を考えたい」と冷静に。

最近シゴヤメ（退職）やシゴヤス（休職）の話をとてもよく聞く。実際にした人も多いし、検討している人もとても多い。

二〇一六年の正月、世がベッキーとSMAPに染まっていた頃、いよいよ実感した。「求心力」なんてものは現実にはもうないと。夏には陛下の「お気持ち」があったんで、やっぱりそういうことだよ、と。そして、これからは「遠心力」でしょ、と思ったわけです。

ある程度わかりやすく言ってみると、「人がある状態に固定されているべき根拠はもうない」。芸能界だけ見ても、不倫も離婚も減らないし解散や脱退は後をたたない。しかし彼らは死ぬのでも消えるのでもなく生き続けていく。ただ、みんなばらばらになっていく。

もう「ガワ」（外殻）には頼れない。一人ひとりが強度を持つしかない。というか、強度を持ってしまった（そういう実感を持ってしまった）から、ばらばらになる道を選ぶようになった、ってことなのかもしれない。

ばらばらになって、またどこかにくっついて、また離れて……というのを繰り返していくのは、

不安定で不安。でもたぶん、ほっとけばそうなっ  
てしまう。「ばらばら」で生きていくやり方を、  
誰からも教わらないできたから。

「ばらばらのまま、みんなで仲良くやっていく」  
ほうに舵を切ったほうがたぶんいい。夜学バーは、  
その練習場のつもりでやっています。

遠心力とは、遠くへいく力。離れていく力。

それをみんながそれぞれ持って、時に手を振り、  
笑い合う。まあそういうふうに、少なからぬ人た  
ちが、すでになっっている。

そこで考えるべきは、「どうやって手を振り合  
おうか？」というところ。それをずーっと、考え  
ております。

### ■一月二三日（木）

↓i

19時15分、とくにお客がないのでi氏と交代。  
22時すぎくらいまでお店にいた。忘れ物を取りが  
てらやってきた方と、兵庫からいらっしやった方  
がご来店。楽しかった。

ほかの人が立っている時も、「自分がお客とし  
て通いたいお店」にはなっていると思う。

### ■一月二四日（金）

「誰かが話していることに対して何かをコメント  
する」というのは一つの技術だが、「何もコメン  
トしないでいる」というのも技術かもしれない。

小さなお店において、カウンターの中心にいる人  
の発言は相対的に重くなる。みんながなんとなく  
聞いてくれている。だから思いついたことのすべ  
てを口にする。「うるさい」感じになってしまう。  
何かを思いついたとき、「言う」と「言わない」  
の峻別を即座に行わねばならない。

日常生活でも当たり前にやっている人はやって  
いる。お客さんたちも基本的には、常にそのよう  
に「言う」「言わない」を検討し続けていること  
だろう。そういう人たちの集う場を想うとき、い  
つも夏目漱石の『こころ』にある「私はちょうど  
他流試合でもする人のようにKを注意して見てい  
たのです。」というフレーズが浮かぶ。他流試合。  
そう、このように不特定多数の人がランダムに集  
まってくるお店では、誰もがみな「他流」なのだ。  
他流だから、どういう態度を取ればいいのか、わか  
らない。わからないから、考える。

「常連」をベースとするお店には、「他流試合」という感覚がほぼない。「常連になる」ということは「同門に入る」ことだから。同じ流派に属するということを、店主やほかのお客から認められることを「常連になる」というわけだから。「常連」が閉鎖的な馴れ合いに堕しがちなのは、そのためだろう。みんなが同じ常識を共有し、同じ仲間意識を持つのが「常連の絆」というやつで、だから店外に出て花見やバーベキューが開かれうるわけである。彼らにはもう店舗空間すら必要がない。そのとき軸となるのは「店」ではなくて「仲間たち（店員＋常連）」なのだ。で、そういう状態にある場では「考える」ということがあんまり要求されない。

そういうお店のあり方は、「安心感」という面では抜群に良い。「考えなくていい」ということは安らぎなのだ。僕はそのような愛すべきお店のいくつかが大好きで、繁く通ったりボトルを入れたりもする。安心のお店はすでにあるので、自分がやるお店は違うふうにしたかった。

と、いうことは、夜学バーはある意味「安心できかない店」なわけである。すさまじい話だ。

もちろん、「居心地がいい」とか「落ち着く」とはよく言ってもらえる。おそらく、そう思ったださる方々にとっては「考えるということが適切に行われている状態」が心地よいのだろう。「みんなが少しづつみんなのことを考える」の、自然に成立している状態が、心地よい。それを目指している。そのことを「居心地がいい」とか「落ち着く」という言葉にしてもらえているんだと思う。ただし、その状態を保つためには自分自身もある程度の「考える」を差し出さなければならぬ。そこが「安心できない」の意味である。

先ほど引用した『こころ』の文、続きはこう。

「私は、私の目、私の心、私の体、すべて私という名のつくものを五分の隙間もないように用意して、Kに向かったのです。」極端にいえば、このように「考える」こと、他流試合のように注意すること。その適度な緊張感によって成り立つ安らぎを是としたいのが夜学バーなのです。

#### ■一月二五日（土）

風ぎつつ充実。お客さんに橋本治さんの『青空

人生相談所』という本をお貸しした。あまり大切な本を人に貸したくはないのだが、たいてい「読んでほしい」という気持ちで勝つ。この名著、もう何冊か買っておかないと。どこかで見かけたら買っておいってください、買い取ります。

夜学バーは空いていたり混んでいたりするわけだけど、「このお店、いつも人がいっぱいいますね」と言われることがある。混んでいるタイミンダのときによく来ていることだろう。一方で、「この人とは一対一になることが多いな？」とこっちが思うお客さんもいる。じつに不思議。

勝手に思っちゃうと、混んでいる時に来る人は「みんなが行こうと思う」わけ、空いている時に来る人は「みんなが行こうとは思わない日に行こうと思う」わけである。後者の人はたぶんナチュラルに「逆張り」できちゃっている。なんだかすごい。そういう「逆張り」の人がもっと増えたら、お店には常にある程度の人がいることになって楽しいので、興味ある方がいたらちょっと「逆張り」いかがでしょうかね？

#### ■ 一月二六日 (日)

日曜の夜は静か、というのはなんとなくあって、この日の前半は特にそう。札幌からいらっしやった方とぼんやりお話しした。不登校の子どもなどへの訪問ボランティアやホームレス見回り、あるいは相談などをやっていたらっしゃる方で、ああ、他流試合、他流試合。知らないことが触れあって融けあって、結晶していく……なんていうと美化した感じだけど、そういうのがこういう「ランダムな場」の醍醐味なのは確か。

後半ぼつぼつと人がくる。偶然、前回の庚申の日（1月18日）にいらっしやった方が4名も。（奇跡にちかい。）そうそう、昨日書いたことに関連するけど、「行こうと思うタイミンダが一致しがち」なお客さんの組み合わせというの、たまにある。おたがい月に数日くるくらいなのに、その中の一日くらいにばったり会ってしまう。何か生活リズムとか、考え方が似ているのかも。

#### ■ 一月二七日 (月) soundai

#### ■ 一月二八日 (火) あすか

## ■ 一月二九日（水）

ある従業員（イニシャルでKとしておきましよう）が17時から24時半くらいまでいた。だったら僕、きょう休みでも良かったのでは？ なんて笑い合ったけど、長い時間いろいろ話せて非常に実りがあった。

お客は少なめ。コロナウィルス報道の影響で、みんな物忌みかしら。心なしか街にも人が少ない。まだ猛威は続くでしょうから、逆張りのかたお待ちしております。

K氏はたびたびお客としてやってきて、その時の問題意識（考えていること）を教えてください。それについて僕もあれこれ考えて何かを言う。そういう時間を積み重ねて間柄は深まり、各自の思索もすんでいく。今回話してくれた内容は僕が今考えていることと隣接していて、大いにヒントになりそう。ありがたい。

その一部は個人のホームページに書きます。

※四月四日追記 ここから三日間は「コロナウィルス」という表記がありますが、その後は出てきません。（おそらく

文字禍をおそれた意図的なこと。）1月末の段階ではまだ「経済への影響」なんて誰も口にしていなかったと思うし、僕も「物忌み」くらいにしか思っていなかったのですが、もともとお客の多くないこういうお店ではダイレクトに「影響」が感じられたのだと思います。29日の国内感染者数は8名、死者0名。ちなみにダイヤモンドプリンセス号が横浜に停泊するのは2月3日。その中で僕はちゃんと（？）三日間は騒いで（？）いたわけですね。でそのあとはすこし黙る。それもバランス感覚、のつもり。

## ■ 一月三〇日（木） ↓ i

21時過ぎまでお店にいたが、コロナウィルス効果（？）なのか、お客なし。i氏と一時間ほど話す。楽しかった。楽しいのがいちばん。話してて楽しい人が働いてくれるからうれしい。

## ■ 一月三一日（金）

1月は初来店のお客さんが多かった気がする。今日も何名か。「二度め」の方もいて、うれしい。「初めて」より「二度め」のほうが嬉しいかもしれない。僕は「出合い」以上に「再会」が好きで、初めて再会するのは通常「二度め」なのだ。ただ、

初めて会うのに「再会」としか思われないうような相手もいる。それも至福。再会よ、あれ、かし。今日もコロナウィルス効果か？と思つていたけど、お客に恵まれた。金曜でも計3〜4人ということはけっこうあるのだが、今日はぐるぐると10人以上。なぜか多くの人が「今日行こう」と思ってくれたらしい。本当に不思議なことだ。毎日のようにお店で「待つ」ということをしていると、不規則な波のうねりに神秘さえ感じる。

わりと人が多かったわりに騒がしくはならず、（実は大きな音が耳に響いてしまう僕にとつて）ありがたかった。秩序ないような時間はあつたが、時とともにおさまるようにおさまったりする。そういうのをぼんやり体感しているのも、とても楽しい。人間観察というより、人間のいる場の観察。自分も参加しているので参与観察とでもいおうか。この面白さが、もっと多くの人に伝えられたらな。

## ■二月一日（土）

芸術とエンタメ、余剰、なぜミャンマーでシネコンが爆増するのか、いくつかの話題がぐつぐつ煮込まれていた深夜0時ごろ、そういう話を好物

とするお客の来訪。「帰りが遅くなる」と確信、あきらめた。そこからさらに広がり広がり、ずいぶん遠くまで行つて朝の7時くらいまで話してしまった。たまに、そんな日もあります。

ここで話したことの一部はブックバーひつじがさんとの往復書簡（とくに四通目）に反映されているし、これから僕の書くことやすることにも影響していくと思います。有意義な時間だった。

ともあれ、たぶんテーマは「自分（個人）」と他人（社会）。依然として、橋本治さんの名著『いま私たちが考えるべきこと』を読み返します。

## ■二月二日（日）

書いている今は2月12日ですが、1〜2月はどうも、新しいお客さんが多い。初めての方が初めてきて、それから数度顔を見せてくださる、というケースがいくつも。そういうのはもう風向きみたいなものだけど、「新年！ 新しい年！ 心機一転！ 新天地！」みたいな感覚もあるのかも。どうぞみなさま、住み着いてくださいませ。

もちろん慣れたお客も。馴れ合いというのではなく、鮮やかに場が立ち上がる、気がします。

■二月三日（月）小津

■二月四日（火）あすか

■二月五日（水）

17時、お昼のさちあきさんと交代。扉を開けたら中1の人と70代の人の姿が同時に目に入り、「そうそう、こういうシーンがつくりたかったんだ！」とうれしくなった。前半はその中学生と、最近来てくださるようになった男性と三人の場になり、じきお二人ともお帰りになって僕一人に。後半は女性がふたりご来店、どちらも僕は初対面で、一方は *soudai* くんの日に来たことがあるという。そこへ最近よくきてくださる男性が加わり、四人の場。女性二人お帰りになり、よく来てくださる男性が一人増え、GLAYを中心とした男性バンドの書く歌詞世界の分析に深く入っていった。何度も書いてしまいますが、一度めが二度めになり、三度めになり四度めになってもらいたい。そのためにはやはり「毎回違っていること」かなと思います。もちろん、「毎回同じである」からこそリピーターは生まれるんだという考え方も承知しておりますので、「毎回同じように違う」と

いうような雰囲気を、なんとかめざしていきます。あるいは、「違う」はあっても「変わる」はあんまりないように努めてみる、とか。

■二月六日（木） ↓ i

前半におひとりお客。呼び出しがあったようので早めに退出されたが、この方のご紹介という方がその後（12日現在までに）、複数回おいでになっている。ありがたい連鎖です。その後しばしお客なく、i氏と雑談して交代。雑談、肝心。

■二月七日（金） あすか ※j新潟出張

■二月八日（土）

ご存知の通り夜学バーのHPにはたくさん文章が載っており（ここも含む）、読みごたえは抜群。一方で、こんなもん誰が読むのかとか、ヤバイ店だと引かれるんじゃないかなど心配も常にしておりますが、けっこうな頻度で「文章がよかった」と言ってくくださる方がおられます。やったー！うれしい。「良い」とか「素晴らしい」とまでは思われなくとも、「この人がやっているのなら、



とって食われやしないだろう」くらいに思っていただけたら本当に甲斐があります。

ツイッターもそうですが、現在は「短い言葉の時代」。ただそれはもちろん一面的な見方で、「長い言葉」を好む人たちも多くなります。

仮に「早くわかる」と「じっくりわかる」ことの両方が大切だとして、「早くわかる」を担うのは夜学バーの場合、お店の名前そのもの（短い言葉）でしょう。「じっくりわかる」は、たとえばこういう文章（長い言葉）。さて、「お店に行ってみる」はどちらか？ というところ、これは両方、同時な気がします。入室すればさまざまなことが一瞬でわかる一方、じわじわとわかっていくこともかなり、あります。

## ■二月九日（日）

僕は小学校2年生の時には「好きな人いる？」と聞かれて「手塚治虫」と答えるようなタフガイ（？）だったので、命日だな、と毎年思います。そんな日に大きなドラえもんをいただきました。僕は本当にドラえもんのが好きです。

手塚先生の描いたドラえもんの絵、というのが

実は残っています。それはドラえもんが舌を出してウインクしている絵なのですが、なんと今日いただいたドラえもんも、舌を出してウインクしているのです。しかも、つぶっている目や舌を出す方向まで同じなのです。

すぐにはこのことに思い至らず、くださった方にお伝えできなかったのが悔やまれます。なんだから、手塚先生と藤子先生の合作のようにさえ思えてきました。大切にします。そうでなくても。

昼間はコミティアという同人誌即売会に参加して、拙著『小学校には、バーくらいある』を売った。5時間立ちっぱなしでブースにいたけど、そんなにたくさんは売れなかった。でも、わざわざ立ち止まって買ってくださいくださった方々はみなさん素敵そうな雰囲気があって、届くべきところに届けられたような気がする。出展料や交通費などを考えるとほとんど赤字みたいなものだけど、参加してよかった。

16時に終了し、急いでゆりかもめとJRを乗り継いで御徒町からお店へ。17時ちょうどに開店。前半、お客がふたり。「粉にしたコーヒー豆をド

リップバーにセットして、お湯ではなくワインを通すと、コクのあるワインになるらしい」と教えていただく。「それなら日本酒でもできるのでは？」という展開になって、お客さんが「では僕が持っている日本酒を提供しましょう」と。出てきたのは鰯祭というお酒の純米大吟醸、精米歩合45%。これを先日焙煎したばかりのコーヒード豆に通してみたなら……おいしい！ というか、不思議な味で、くせになる。こうやってメニューの幅は広がっていくし、それより何より、「場」というものはたちあがっていく。とても素敵なシーンだった。

その後またお客さんがやってきたり、お帰りになったりして、またふたりのお客。お一人は、なんと昼間にコミティアで本を買ってくれた方。もちろん初対面。なんとなく会場を歩いていて、たまたま僕の本を見つけたとのこと。

『小学校には、バーくらいある』の帯には「すてきなことは光ってくれる」というキャッチフレーズがある（これも僕の自作）。まさに、この本は光ってくれたのだ。そして彼の目に止まった。なんとうれしいことだろう。

200ページくらいある本を、彼はすでに読み終わっていた。そして「すばらしかった」と言ってくださった。そしてお店にまで来てくれたのだ。聞けば電車で2〜3時間かかるところにお住まいで、コミティアのため東京に宿をとったのだという。いろんなことがそろって、シーンは生まれる。

札幌に住む友人が「行きます」とずいぶん前に宣言してくれていた。この日に千葉で講演をするので、その後にと。講演自体は夕方終わるもの、たぶんそのあと懇親会か食事の席でもあるだろうから、遅くなるだろうとは思っていた。23時くらいになって、「さすがに来ないかなあ」と思いつつ、「実は今日」とみんなに話した。津田沼も近くはない。「きつと彼は来る」と言いながら、『走れメロス』を思い出していた。

それまで「待つ」ということの大切さについて何時間も話していたのもあり、23時を過ぎて彼が現れた時には、その場にいた人たち（主に僕だけ）の感慨はひとしお、涙目のようになっていた。お客さんもいた（ように僕には見えた）。

「シーン三部作」完。

## ■二月十日（月）

「文学フリマで本を見かけて、その時は買えなかったんですけど気になって」と。去年の文フリ（即売会）きっかけでお店まで来てくれたのは、ひよっとしたら初めて？ 知らないだけで、いらっしゃるのかもしれないけど。

通りすがりで「夜学バー」という文字に惹かれ、来てみたという二人連れの方々も、本を買ってくださった。ただ勢いで買ったというふうではなく、冒頭の「ひかるかざり」の描写が気に入ってくれたようだった。「バーってまさにそういうふうに見つけますよね」と。

中盤、けっこう長くふたりきりになった初来店の方とは、文化の話はかなり深く掘って行った。こういうサシ飲みのような状況も、本当に楽しい。そこに人が増えるのはもっと楽しいかもしれない。23時すぎ、誰もいなくなったところに1、2、3とよく慣れた方々がいらっしゃり、第三部という雰囲気。2時からいまで営業し、ジャニーズについてなど話す。

## ■二月十一日（火）

ずいぶん前に引越していかれた方が久しぶりに。「麒麟山 伝統辛口」という日本酒を浅煎りのコーヒー豆にドリップで通した（！）ところ、お連れの方がだいぶお気に召したようすで、「家でやる！」と。みなさんそうおっしゃいます。コーヒー焼酎なんかだと漬ける時間が必要だし、待った割においしくなかったときのダメージも大きい。ところがドリップ式（？）だとすぐに飲めるし、おいしくないとと思ったら即座に改良を試せる。うーん、これはすごいことだ。

お二人がお帰りになった頃、またお二人。こちらも遠く（ご実家）へ引越していった方。あたたまる旧交。いいですね、やっばり、再会。

宇宙の研究をしている方からいろいろと教えていただく。DNAの配列を組み替えることにどういう用途があるのかとか、その応用で絵文字を作ったとか。「場の量子論」がなんなんだか、とてもわかりやすく説明してくださった。うん、なんとなく、ほんの輪郭の輪郭だけわかったような。こういう実的な学びも多くて、とてもありがたい。こないだも疎水性相互作用とかファンデルワールス力とか教わった。10以上も年下の方々か

ら。あなとうと。

終わりかけの2時間ほど、従業員K氏とさまざま話す。最近彼と話す内容は本当に重大で、僕を考えていることをかなりアップデートしてくれている。それこそ十二支ひと回りほどの差があるのだが、まったくそういうことは関係がない。あえて言うようなことでもないんだけど、たまにはあえて。いい店アピール。

#### ■二月十二日（水）

来客と来客のはざまの、空白の時間が二度あった。友達の帰ったひとりの部屋でコアをすすめるような、一抹の寂寥感とくすぐられるような嬉しさがともに湧く。そしてまた待つ。こういう感覚が好きなのは、小さなお店をやるのは合っていると思う。いつでも、働いてくれる人は探しておりますが、とにかく何よりもこのお店が好きなお店。誰もいなくても、ここでただひとり空気を吸って、「ハァ〜」とか思ってくれる人。マンガとか読んでられる人。コーヒーとかお酒飲んで、虚空見つめて、かっこつけた気分になるようななら、なお。ちなみにお給金はあんましでません。

#### ■二月十三日（木）

↓

僕的时间（〜20時くらい）はお客なし、かな。たしか。このあたりから感染症の影響「第二波」が押し寄せてきたように思います。（第一波は体感として1月末くらい。）そのせいばかりではないかもしれないが3月3日現在まで売上はたぶん日ごろの半分より低いくらいになっています。その意味ではこの先のジャーナルはけっこうおもしろい記録になるのではないのでしょうか。

いずれにしても、僕および各従業員に用がある人はいま（とりわけ早めの時間）がおすすめです。

#### ■二月十四日（金）

香川の高専生がおふたり。いろんな土地の人に知られておきたいので「ぜひ地元で宣伝を〜」なんてお伝えしておいた。多少でも、遠いどこかで噂になったら嬉しいな。

夜学バーは「近所型」のお店ではなく、「わざわざ型」のお店。「近所だから／どうせ店の近くを通るから」というよりは、「ちょっと遠回りだけど寄って行こうかな」とか「予定がないから遊びに行こう」といった気分の人が多いと思う。だ

から天候や流行り病、不吉なニュースなどの影響がダイレクトに表れる。「今日は縁起が悪いから早く帰ろう」「最寄り駅でコーヒー飲むくらいにしとこう」となると、「わざわざ型」のお店は選ばれない。それはそういうものだというだけなんだけど、しかしお客がなければ困るので、「わざわざ」来てくれる人の母数を増やすのが肝要だと今のところは思っている。

「東京」の「上野」といえば、巨大な人口を擁し交通の便もトップクラス。それでもこんな妙ちきりんなお店に「わざわざ」行こうという人の数を増やすのは簡単でない。ただ「わざわざ」のいいところは、どれだけ遠くからでも来てもらえる、ということ。だから「東京」だけでなく、「日本全国」を視野に入れて広報をしていきたい。

（「全世界」になると僕の手にはおえない。）

いわゆる「居場所」というものは、どちらかといえば「近所型」が多い。夜学バーは「わざわざ型」で、だから「居場所」の「居」がややそぐわない、のかもしれない。

西部劇の酒場には、旅のガンマンが立ち寄る。ドラクエに出てくる「ルイーダの酒場」なんかも

そう。旅人たちはきっとアリアハン（地名）に立ち寄るたび「ルイーダ」で休むのだろう。そこで顔馴染みもできるかもしれない。そんなようなお店でもありたい。僕もいろんな地方都市にそういう場所を勝手にたくさんつくっている。

もちろん近所の人にもいっぱい来てほしい。土地の人と旅の人とが自然にとけあうようなふうがいい。この日も近所のお店の人や、歩いて帰れるくらいのところに住んでいる方がきてくださった。職場が近いから、という方も。いろんな人がいろんなようにいてもらえるのがすばらしい。

とてつもなく余談で私事だけど15歳のときに開いたホームページも、はじめからテーマは「ごった煮」。統合された自分像、なんでもものはなかったから、「持っている要素はぜんぶ入れてやれ」と思ったし、「中学の友達も高校の友達もネットの友達もみんなきて！」ってことははっきりと言葉にしていた。

やっていることは変わってない。十代のころの友達と近所の人、ネットで知ってわざわざきてくださる方など、いろんな人が同時にいます。

■二月十五日（土）

『小学校には、パーくらいある』好調です。お店の販促パンフレットとして作った側面も大きく、その役割はかなり果たしてくれていると思います。ただ、「読んだか読んでないか」ということが店内に影響しないよう、細心の注意を払わねばなりません。みだりに「読んだ人たちの場」にならぬよう。それはこの文章も同じです。

■二月十六日（日）

日曜の夜らしく、ゆったりとした営業。

お客が1〜2人で、そのままの状態が1〜2時間ほど続くと、時間の感覚がおかしくなってしまう。うっすらとした「変性意識」状態に入る気がする。トランスというか。暗くもなく、うるさくもない店内で、ただ同じ風景のまま時間が経過していくことで、「縁側感」が出てくるって感じだろうか。そんなところでギイッと扉が開くと、ふたたび時間が動き出す。いたって自然に。おもしろい。

■二月十七日（月）

■二月十八日（火）

あすか  
あすか

■二月十九日（水）

■二月二〇日（木）

i i

■二月二一日（金）

高3の進路決まっていけない人や、大4の進路決まっている人。この季節ならではの情緒がある。前者の人は受験が終わったばかりで早速きてくれたのだろうし、後者の人は残り少ない大学生の時間のいくらかをこのお店で過ごそうと考えてくれたのだろう。

金曜ということで仕事終わりの人たちも。曜日問わず本当にお客の少なかった2月後半のなかで、それなりにお客があった。しかし満席ということはなく、ちょうどいい感じだったかも。

■二月二二日（土）

風いだ土曜。しっとりとした時間が過ぎていった。経済面はともかく「場」としては快く通常どおり。できるかぎり換気をよくしたうえで温度や湿度を調整し、消毒などをしっかりする。状況に応じた当たり前のことは当たり前やりつつ、あとは特筆すべきこともなく、粛々と営業しています。

■二月三日（日） i

■二月四日（月）

からっきしお客なし。途中（22時前くらい？）で従業員 i 氏が遊びにきたので、一緒にカウンターに入ってカクテルの練習など。すると（23時すぎ？）その日最初にして最後のお客が来店。止まったような時間を三人で過ごす。また格別。

■二月五日（火） あすか

■二月六日（水）

大学生が2名、新卒1年目が1名のみ。平時もこのくらいの日はあるが、さすがによく続く……。やっぱり止まったような時間がずっと。閉じた空間の醍醐味よ。そして常に、誰かが新しく扉を開けるかもしれない、という期待感と緊張感が渦巻いているのが「お店」ならではの空気感。

渦巻いたものが吹き抜ける風にもう一度舞い乱れ、ふたたび渦巻いていくことが「流動的な場」というもので、それをみんなで作っていくのが楽しいし、きつとなんにでも役に立つ。

■二月七日（木） ↓ i

早い時間に人が集まり、めずらしく19時くらいですでに5名のお客が。20時くらいからは i 氏に交代してしばらく客席に。それから23時くらいまでにやってきたのは、たしか2名。そのあたりで僕は帰宅。

■二月八日（金）

前半は長閑、1〜2名のお客とゆったり過ごす。湯島から三鷹に引越した方が展覧会のDM持っで一瞬だけ寄ってくださる。それから22時くらいになっても何もないので、「世はプレミアム金曜だが今日はこれで終いか」と思っていたらほろほろとお客に恵まれる。ありがたや。昨日は前半、今日は後半にお客が集まったというわけ。どうなるかわからないのが水商売のおもしろいところだし、やみつきになる麻薬的な部分でもある。

小さなお店にはいろんな使い方があって、仕事や人間関係やなんやらかんやらに疲れたとき、とりあえずまったくそれらと縁のない空間で人と接することによって、なんとなくリセットされるような気になったりすること、とか。そういうふう

に使ってもらえるには、「そこに行つて嫌な思いをする可能性はわりと低いはず、もしあったらすぐに帰るようにしよう」と思えるような対象になること、かしら。ただ、「安心感のあるお店にしよう」とことさらに意識してしまうと「甘やかす」にもなりかねず、すると場のバランスはやがて悪くなる。難しい。まあ、ごく自然に。帰り際ひさびさに隣のバーへちょっとお邪魔。

## ■二月二十九日（土）

18時に「記者会見」があつて、「多数の方が集まるような全国的なスポーツ、文化イベントについては、中止、延期又は規模縮小などの対応を要請」「換気が悪く、密集した場所や不特定多数の人が接触するおそれが高い場所、形態での活動も当面控えていただく」「全国すべての小学校、中学校、高等学校、特別支援学校について、来週月曜日から春休みに入るまで、臨時休業を行うよう要請」というような内容。

この土曜のお客は3名、翌日曜も3名。どちらも17時から25時くらいまで8時間営業。普段もこのくらいの日は（特に日曜は）めずらしくないの

で、影響のほどはよくわかりません。

夜学バーは狭いお店で、お客が3名以上になると1メートル以上離れて座ることは難しい。ただ換気扇はけっこうよく効くし、そろそろあつたかくなつてくるので二つある扉をそれぞれ開ければ風通しはかなりよくなります。もし20人くらいの人が入ったらちよつと心配だけど、客席は基本的に8席（いくつか増やすことはできます）、同時にいるお客はだいたい1〜5人くらいが多いので、「換気が悪く、密集した場所や不特定多数の人が接触するおそれが高い場所、形態」といえるかどうか。1日の来客はだいたい5〜10人くらい、最近3人前後という日も多くなっています。もともと大きな声で話すようなお店ではないし、消毒、手洗いなども励行しているので店内での感染・拡散リスクはそんなに高くない、はず。

しかし、満員電車に乗らないと夜学バーに行けないとか、からだの弱い家族がいるとか、大事な時期だからとか、感染・拡散リスクをわずかでも高める行為は一切したくない等、いろんな事情や考え方があつたため、「おいでませ」と強く言うつもりはありません。「御遠慮なく」とは、はっき



り言っておきます。行きたいと思っただらどうぞ。もちろん熱があるとか咳やくしゃみが出るといった症状のある場合は、「行きたい」を抑えていただいたほうが良いと思います。

もし僕の身体に変調があったら、まずは元氣のある人たちに代わってもらおうでしょう。症状が続くようならお店はしばらく閉めるでしょう。いろいろ考えてはいます。栄養と睡眠もしっかりとって、手などのふれる位置も常に意識し、電車もバスもタクシーも乗らず（そうでなくても常に自転車！）、リスクができるだけ下がるようにいくら店内のものの配置やオペレーションを変えたりもしています。夜学バーというからには、使えるかぎり頭を使っているつもりではありません。

「だれかと時間を共有する」というのは楽しいものです。それが特別な時間であれば、ひとしお。

### ■三月一日（日）

この二日間、3名ずつお客があったけど、いずれの方とも良い時間が持てたと思う。人が少ないからというのもあるし、こういう時勢だからというこゝも。「いろんなことに気をつけながら、や

るべきことややりたいと思うことをできるだけやる」という気分を、お店にくる方々は共通して持っているように感じる。その心強さが、こゝろよさにつながっているのかもしれない。

唐突な不景氣だけど焦らずに、これまでなさまざまな貯蓄に感謝しながら、少しでもよき未来にできるよう心を尽くしていこうと思っております。よろしくお願いいたします。

### ■三月二日（月） 小津

18時ごろからしばらくお客として在店。「小津トンクラー」(ポストンクラーの亜種)をつくってもらおう。ジンジャーエールではなくソーダでつくるものだが、こういうのは、よほど上手にできないと「とてもおいしいレモンサワー」という印象から離れられない悲しみがある。駆け出しカクテル研究家のi氏には先日「ジンフィズ」をつくってもらったのだが、これもやはり「めっちゃおいしいレモンサワー」になっちゃおう。

なんにせよ彼らのおかげで僕も一緒にカクテルをゆっくりと研究していられるのでありがたい。みんなで少しずつ、夜学バーの酒の質を底上げし

ていきましよう……。

声の使い方や身体の向き、カウンター内での位置取り、勇気と度胸、所作のさりげない美しさ、などなど、僕もまだまだ無限に磨いていきたいことがある。「会話の内容（面白さ）」なんてのは本当に二の次、三の次で、大切なのはバランス。何より「距離感」が大事だし、あとは空間の使い方だったり、リズムやタイミングだったり。そういうことをちまちま考えてかってに訓練しているのがとても楽しい。（演劇や学校の先生をやったことがあるからこそその感覚かもしれない。）

### ■三月三日（火）

### ■三月四日（水）

こんな時勢（感染症の流行で外出や消費の一部が控えられている）だからとあえて来てくださる方もいると思う。本当にありがたい。はげみになります。もうちょっとがんばります。

教え子が来店。「（6年ぶりに）東京に住むことになりました／（超すごいところに）就職しま

した／（一ヶ月前に）結婚しました」と三連発。

心の中ではオオーっとなったがお店だし平静に「オウ」と答える。正直いえば扉を開けて顔のぞいた瞬間に「ワアー！」っと声をあげてカウンターをのりこえピンを4本くらい割ってごく近距離で「ようきたな！」と握った拳を目の前に突き出したかったが、営業中なので「おっ」くらい。

お客はお客で、「ひとまず」そこに凸凹はない。そういうふうにしておきたいから、あるお客の来店に対して驚いていたり喜んでたり、あるいは嫌な予感がしていても、できるだけ小さなリアクションにする。せいぜい「おっ」くらいにする。扉の開くなり僕が「ウワー！」と叫び出したら、よっぽどのが起きたと思ってください。

僕としては「おっ」が出てしまうのさえ相当の事態。かなり感情が動いたときです。基本的にはフラットでいたい。しかし「おっ」は「おっ」で独特の機能を持つので、我慢するよりは出してしまおうと思っっている。

機能というのはまず、その入ってきた人に対して「あなたのことを認識しているし、少しくらいは驚いている」という「ほどほど」のサインを送

れること。これがまったくないと相手を不安にさせすぎてしまう。「あの、ほら、わたし、わかります?」〇〇高校で教えてもらってた××ですけど、覚えていますか?」となるかもしれないし、「久しぶり!」などと大袈裟にいえば「お久しぶりです! 実はわたし」となったり、いづれも即座に「新しい話」の展開してしまう可能性が高まる。そういうのが面白い時もあるけれども、その入ってくる直前の場の空気との兼ね合いもある。少し遅らせたほうが無難ではあろう。

まずは「君のことを僕はわかっているよ」と示して安心してもらい、座って落ち着いて、その上で当座の「場を見て」もらう時間をつくる。理想としては。そのためにある種の「ほんのりとした主導権(?)」じみたものを、「おっ」として演出してみる、という感覚。たぶん。

また、その場にいる人に対して、「この人とジャッキーさんとはなんらかの(おそらくは深い)関わりがあるのだな」と思ってもらえる効果も。これが「伏線」になってくれたりする。(ただ、伏線が機能すりゃ面白いかっていうとそういうことではない。)

初めていらっしやったお二人としばらくのあいだお話。医療関係の研究や臨床が専門とみえた。しかしそういう話題を特にするわけでもなく、いろんな事柄について「あれはこうか」「ならばこれはどうだ」「自分の知見からはこう言える」などなど、「三人の真ん中に置かれた話題について、三方からつついていく」というような状態が心地よかった。

「自分がすでに知っていることや考えたことがあること」を内から引っ張り出してくるのではなく、目の前にあること(誰かが話したこと)に対して、ゼロから自分の考えや意見を組み立てていく、という方法をとってくださっていた。「ゼロから」始めることによって、目の前にあるトピックとの矛盾や逸脱を避けやすくなり、「真ん中にある話題」がブレない。

だからみんなが、そこを見ていられる。

### ■三月五日(木) ↓i

大阪にしばらく(たしか三週間ほど)出張に行っていた方がご帰還。お土産話をいただく。「飲み屋に18軒行った、こんなにお店を巡ったの

は生まれて初めて」とのこと。楽しそう。

そのお話をもとに「お店」ということを考える。その後、夜学従業員がなんと2名も飲みに来てくれて、途中交代したi氏とあわせて4名が「中の人」という、一見ダッサイ状態に。念のため言うておきたいけど、これだけいるのは珍しい。しかしよく訓練された夜学従業員たちは決して「内輪」に墮すことなく、つねに「他流試合をする人のように」場を見てうまく気配を調整した振る舞いをしてくれる（……と期待している）。

もっとも、いま手伝ってくれている従業員のほぼ全員がみな二十歳前後の頃から僕のお店に通ってくれていた「お客さん」だったので、好きな時にお店にくるのが自然だし、お客としての振る舞いも堂に入ったものである。当たり前だけど。

途中、完全に「中の人」だけになり、ますます「お店の話」になっていく。よいお店とは何か。「世の中をよくするお店」とはいったいなんなのか。こういう折に意思疎通をすることで、なんとか「夜学バー」の体裁は保たれているのだと思う。全員が集合することはめったにないけれども、さまざまな組み合わせで顔を合わせるうち、なんと

なく認識が通じていく。

古い喫茶店に行くと、「お客なのか店員なのかよくわからないおじさんやおばさん」をけっこう見る。そういうお店はたいいてい僕は好きだ。夜学バーもそんなようなことでいい気がする。馴れ合いや「常連感」は排除しつつ。

実際、「え、今の人、従業員さんだったんですか？」と言われるくらい気配を消してくれていることはよくある。店員もカウンターの外に回ればただの客なのだ。それを僕はドラゴンクエスト4の第三章「武器屋トルネコ」でよく学んだのである。（わかる人だけうなずいてくださいませ。わからなくてひまな人は、ごプレイをぜひ。）

### ■三月六日（金）

久々に人が入った、という感覚。これ書いてる今現在は24日なんだけど、振り返るとこのあたりから「反動」が始まっていたと思う。様子見を終え、「そろそろ」と外出する人たちが増えてきたのじゃないだろうか。

数えてみたら総計で10名。これは決して多くな

い。8時間営業して10名で、同時にお店にいるのはせいぜい3〜6名くらい。さして混まないのが安心(?)を。

そんなことより面白いデータをご覧ください。

1月1日から3月5日までの僕の担当日(全体の7割くらい)で、来客数が10名を超えたのは、1月3日、11日、12日、18日(庚申)の4回のみ。つまり1月19日から3月5日までの47日間、客入りの少ない状態が続いていたことになる。感染症が騒がれ始めたのが一月下旬なので、そのくらいに影響は「あった」と思っている。

3月6日から23日(この記事を執筆している日の前日)までに僕が単独で営業したのは14回。そのうち6日、15日、16日、18日(庚申)、23日で10名を超えている。14回中5回、3分の1以上。かつ、僕のいない日にもいくらか繁盛していた日があった。いかに1月下旬〜3月初旬が異常で、いかにそれが「戻ってきた」かがわかる。

とはいえ「戻った」という表現はふさわしくない。普段から常に状況は変わり続けていて、「定常」などないのだ。「変わり続けている状況のな

かで、急激に減った来客数が、一時的に上昇傾向にある」らしいというだけのこと。実際、6日以降も半分くらいは1〜5名程度の来客数だった。依然、まだまだ経営の危機は続いております。

しかもこれは「数」だけの話で、「どんなお客が来ていて、来なくなつて、また来るようになった、まだ来ていないのか」といったことは、数字からはまったくわからない。(数字以外のことから何かがわかったとしても、あまり意味はないし興味も持たないつもり。)

ずっと通つてくださっているお客さんが、僕の『小学校には、バーくらいある』を読んで、「まるでこのお店ですね!」と言つてくださったのが、本当にうれしかった。「自分の子供に読んでほしい」とか「自分の子供がなんとか自力でこの本やこのお店を見つけてくれたら」といった感想も、めっちゃくちゃうれしいヤツです。

### ■三月七日(土)

AさんとBさんとで初来店し、その後AさんがCさんを連れて再来店、みたいなことは、とてもう

れしい。もちろんAさんBさんがのちお一人で行ったのも超うれし。なんにせよ再会はうれし。そんな単純なことで僕は本当に心から喜んでおりますが、お店の中では「ワーイ！うれし！ キャー！！」みたいな反応はグツと我慢しています。じつはとってもうれしいのです。みなさま本当にありがとうございます。

再会というところ「一度でも会ったことがある人」に対して言いますが、「邂逅」は初対面でも使う言葉ですよ。よそのお店で「邂逅」を果たしたお二人が、「再会」の場所として夜学バーを選んでくれる、というようなことがあったようで、こういうことも非常にうれしく思います。うれしがってばかり。

### ■三月八日（日）

6日に「客入りがあった」と書きましたが、この日のお客は3名。しっとりしておりました。

### ■三月九日（月）

この日のお客は1名。しかも深夜0時きっかり

にやってきました。7時間ぼんやり口を開けておりました。救世主のように見えました。

### ■三月十日（火） あすか

### ■三月十一日（水）

お客は4名、アピールしておきます。3月の来客数の傾向は「多い日は多く、少ない日は少ない」で、平均すれば心許ない。

再会といえ、年単位で会わなかった人たちどうしが、このお店で「あっ」と顔を合わせるようなことはたまにあります。邂逅といえ、やはり「歩いていたらまたまた見かけて、店名と名刺（入り口に貼ってある）の文章に惹かれて来ました」というのは、心からウッシャー。

### ■三月十二日（木） ↓ i

早い時間からお客に恵まれ、3名お迎えしたところで2時ごろi氏に交代。

彼に限りませんがみな優れた人たちです。しかし僕と同様まだまだ修行が必要なので、ぜひともいろいろお相手を。

### ■三月十三日（金）

初めてのお客には「他流試合」という気持ちで臨む。二度めでもそうだし、何度めであっても、その場にいる人の組み合わせがよほど慣れたものでなければ、すべて他流試合の巴戦とかバトルロイヤルといったふうに思う。で他流試合とはどんなもんやというと、僕の心がけとしては「注意してかかる」というただ一点。

共通のルールはない。展開はなにも予測できない。場の動きに耳を澄ませる。それに応じて柔軟に動く。

片膝ついて、片手の拳を地面につける、子供のころ何かの本で「忍者のポーズ」と見た。すぐに飛び上がれるのが利点らしい。刀の柄に手をかける、というのだと物騒なので、僕はこの「忍者」を心の中に浮かべるようにしている。

なんでそんな、飲み屋の店主が臨戦態勢やねんという気もあると思う。「あー！ どうもいらっしゃい！ はじめまして！ ま、ゆっくりしてってよね、ガハハ！」みたいなお店も僕は大好きだが、自分がやるならそうでなくてもよい。

3月4日の記事で「ゼロから始める」ということを書いたけど、お店における関係や話題というのは、ゼロから始めたほうがいいだろうと考えている。「すでにできあがった雰囲気や関係性」が強いと、「常連客が固まって内輪話ばかりしていて居づらい」ということになってしまう。

「ゼロ」というのは、ふつうある程度の緊張から始まる。公園で遊んでいる子たちに「入れて」って言う時も、一人でこっち見てる子に「入る？」と問いかける時も、おそらく両者、緊張している。

お店という空間では「入れて」や「入る？」はまずないが、それに似たような瞬間はある。「それ、すごい良いTシャツですね」とか。「おいいです」とか。「寒いですね」とか。ちよっと視線を、どこかに向けるとか。その時、澄んだ緊張はその意思をまっすぐ通す、のデアル。

### ■三月十四日（土）

スツと場が、分断されることはある。教室に犬が入ってきたような場面さえある。授業中に犬が入ってきたら授業は中断だが、休み時間なら中断はされない。むしろ犬の侵入は休み時間を永遠に

する期待まで生徒たちにいだけせるのだ。  
授業中でも休み時間でもない、生活というすべての時間は、気持ちしだいでいかようにもなる。楽しくやりたく存じます。

### ■三月十五日(日)

早い時間にまず五人組が現れる。ネットで知って来てくださったというお初の方々。落ち着いて素敵に居てくださったので人が増えても乱れることなく、よいバランスの場になった。そして二人組、お一人、三人組と来店し、ひとときは補助椅子が出る盛況。(半年に一度、あるかないか。)

それが前半。それから一切人ふえず、五めいさまお帰りのあとはゆったりと、若者の恋の話を聞いていた。

### ■三月十六日(月)

休学継続か退学か迷っている人、休学中で復学を決めている人、在学中で恋に悩む(昨日初来店した)人、と三様の学生たち。そこに社会人学生(僕)と僕より年嵩のお客がお一人。というのが早い時間の模様。そこへまた新しいお客がやって

きて、入室の瞬間からその人が喋る喋る。まさに14日の記事に書いた「教室に犬が入ってくる」という状況。

唐突な「立て板に水」によって瞬時に場は分断され、一つ支配的な空気になった。しかしそれに對して悪意や被害者意識を持つべきなのは、それが「授業中」である時だけ。夜学パーはどちらかといえば「休み時間」でありたく存じますゆえ、だからなんだということはない。「数人で話していたら急に隣のクラスがよく喋る子が割り込んできてわちゃちゃとなった」という趣。

いちど僕のいない日にいらっしやったことがあるそうだけど、僕とは初対面。それで一秒とおかず「立て板に水」なのだからそれがその方のリズムなのだろう。一方で「場」というものは複数の人によって構成されているので重視されるのはハーモニー。調和をめざすうちにリズムが刻まれたり止まったりフリージャズのごとく不規則に動いていく。彼が来てからの一時間ほど、「立て板に水」からの「ハーモニーの醸成」そして「リズムの共振」という流れが、ややたどたどしくも少しずつ生まれていったのが(僕には)見えた。



彼は「複数の人に同時に話しかける」ということをする人だったし、「ある特定の人に働きかけつつも、その働きかけは場の全体に向いている」もしてくれた。それは「場の中心になることが多い」ということでもあったけど、ひとたびほかの人が話し始めれば、黙って耳を傾けて最後まで聞く。「おれはこう思う」は言うけれども、「きみは間違っている」はたぶん言わなかった。

そういう人がいる場合は、「そういう人がいる場」になる。ただそれだけのこと。自然に任せれば「独壇場」にもなるだろうが、働きかけ次第では「ハーモニー」のほうに持っていくこともできる。そのためにいろいろと工夫をするのが「場（バー）のマスター」の役割。うまくいったかはわからないけど、やれるだけのことは尽くしたと思う。少しづつ場は滑らかになっていった。いつでもそうなるためには、もうちょっとたくさん夜の必要だろうけど。

僕はそういうことを意識してそれなりにやろうとする人だからまだそうなる（ハーモニーが生まれる）率は高いと思うけれども、他の人ならわか

らない。特に若い男性や若い女性だとまず「なめられる」というところからスタートさせられがちなので、適切に場を管理することは難しいだろう。しかし「のまれ」たらおしまいだ。「敵をのんでものまれるな」というやつ。大変だけたぶんそれがいい。

たとえばある種の「若きスナックのママ」はたぶん、そこに血道を上げていくはずだ。若い女性がお店を円滑に運営していくにはいろんなやり口のパターンがあつてその一つに「決してのまれない」はある。それにはさまざまな道すじがある。一言でまとめれば「強さ」なのだが、その「強さ」の種類はとりどりである。

年上の客を「ママに言われたらかなわない」と服従させるには、おそらく「愛される」しかない。「惚れさせる」でもよからうが、「かわいいな」では足りない。愛されるには強さが必要なのだ。富士山が究極に頼もしいように。

僕が初めて小さなお店のカウンターに立ったのは21歳くらいで、週一でやるようになったのがたしか23歳。「なめられていた」という実感はない

が、「生意気」や「非礼」とは思われていたかもしれない。どちらかといえ、そっちのほうがマシかと今思う。

いまだって僕は若い（欲をいえばかわいい！）部類に入るはずだけど、「店主」であるというところで一定の敬意はただけていけると感じる。あとは、えらそうなのが板に付いてきたのかしらん。

### ■三月十七日（火） あすか

23時ごろお店に顔を出す。従業員が一人、お客として来ていたので、三人でまた「お店とは」みたいな話をする。二人ともかしこく勘もよいので大いに参考になる。

夜学バーはもちろん僕個人の美意識を強く反映したお店だけど、美意識と想像力とは別のものなので、僕だけでは及ばない部分をみんなが補ってくれているという感じがある。ありがたい。

### ■三月十八日（水） ※庚申につき朝まで

早い時間からお客。春休みの高校生が隣の隣の県からわざわざやってきてくれた。彼のように若くして「こういうところ」に顔を出しているのと、

周りの成人からよく「若いうちからこんなところに来るなんて」と言われるらしい。もう言われ飽きている様子だった。そう言われないうちになることも課題だねという話もした。

「来るなんて」のあとには「すごい」や「羨ましい」がくる。自分も若い頃にこういう、学校や家庭と離れたところで大人と交流を持てる場がほしかった、という感想が多い。僕も同感である。名古屋でフツの高校生やってたので特にそういう場はなかった。「愛知の高校演劇」というコミュニティはあったが、大人と会う機会はあるまりなかった。インターネット上にはある程度大人の友達はいたけど、それもほぼ二十代前半くらいまでだった。

当の高校生もそのように思っているようで、「どうしたら自分のような中高生が外の世界と触れ合う機会を得られるだろうか？」ということに興味を向け、実践しようと企ててもいる。

彼にも話したのだが、この動機は自分が「高校生」ではなくなくなった瞬間に消えてしまう可能性がある。高校を卒業してしまえば、急にその地平は開けてしまうのだ。どこにだって行ける。どこに

だって連れて行ってもらえる。そうすると「くすぶっている中高生」は意識から消えかねない。「なんだ、自由ってのはたった数年待てば手に入るんじゃないか。そこには無限の可能性が広がっているじゃないか」と。

もちろん中高生はその「数年」を「たった」なんて思っていないし、それから数十年が経過した人たちも「中高生のうちにそういう場に巡り合えるのは羨ましい」と言うわけだから、「なんだ」と思っているのは当事者の青年だけなのだ。大学生くらいの人は、「現在」の立場であれこれ活動することが楽しくて、「中高生の頃にくすぶっていた自分」というものを「過去」にしてしまう。

そして「現在」ばかりを見てしまう。世の中には「過去」の自分と同じようにくすぶっている人たちが依然として無数にいるのに。で、かなり時間が経ったあとで、「あの頃は利根的だったな」と反省したりする。

広い世界を知るなら、若ければ若いほど良いと僕は思う。知りたいと願うような人であればなおさら。(むろん、いろんなことに気をつけながら、時にはこっそり。) だからそういう人たちに目を

向け《続ける》ことは大切だ。彼にもぜひ、その炎をたやさないでいてほしいと勝手に望んでいる。夜学バーは、僕自身が「中高生（ほんとは小学生!）の時に巡り合えたらよかった」と思えるようなお店として存在させ続けるつもりだし、そういう人たちがアクセスできるような仕組みを、なんとか整備していきたいと思っている。アイディアのある方、ぜひ御協力を。

僕が学校の先生など教育に関する仕事をずっとやってきたのは、「教える」ためなんかではない。そういう彼ら彼女らと「出会う」ためなのである。と、カッコつけとこう。

人が増え、減り、増え、とやっていくうちに日付が変わっていた。今夜は干支で見て「庚申」の日、六十日に一度の、朝まで営業する日である。なかなか盛況だった。福岡からお客があったり、夜中に三人くらいで買い出しに行ってもらったり、二時以降にもお客が増えたりと、あれこれ具体的に楽しかった。

あるお客は、扉を開けてキョトンとし、「尾崎さんは？」と。「僕です」と答えるも意に介さぬ

様子で、聞けば「新宿の某店で働く尾崎という名前の人」を僕と取り違えていらっしやったという。僕もその尾崎氏を知っているんだけど似ても似つかぬ別人。「金髪でガタイのいい強そうな人」がいるはずなのに、「黒髪で痩せた弱そうな人（僕）」がいたのでびっくりしたことでしよう。

しかし僕のホームページの文章や詩などをよく読み込んでくださっていたらしく、「あの金髪でガタイのいい強そうな人がこんなすてきなものを書くのか！」と驚いた「そうな。うれしいです。」

尾崎という名前以外には共通点などなさそうなものを、よくぞ取り違えてくださったもの。いったいどういう経路で僕を見つけたのか、まったくわからない。でも面白いからなんの問題もない。

なんだかんだお店を出たのは朝の七時くらい。次回は5月17日（日）です。日曜だし今度は閑散かな……お待ちしております。

庚申の日は朝までということ僕も多少いつもとは違う気持ちで臨むし、多少いつもとは違う動きをする。どのように違うのか、というのを今回意識してみたところ、ひとつ確実なことがわかつ

た。特に終電がなくなったあとは、時間がたつぷりあるので、一つ一つの「尺」を長めにとる傾向がある。悪くいえば冗長になるということでもあるが、良くいえばふだんなら無視、軽視せざるをえないところまでケアできるということでもある。ようするにのんびりやれるということ。

ということとは、ふだん意外と「時間にシビア」なのだ。いつ次のお客が来るかわからず、今いるお客がいつお帰りになるかわからない状況の中で、あまり悠長にはやっているとられない。もちろん「時間をかけるべきところには時間をかける」ということは最優先するが、あまり時間をかけすぎることとできない、という板挟みの中でバランスをとっていくのが普段の営業である。（このあたり抽象的でわかりにくいと思いますが、すみません。なんとなくイメージで。）

庚申の夜はいつもに比べれば多少時間にゆとりがあるので、「時間をかける」ほうに意識をより傾けることができる。「庚申の日は途中からジャッキーさんがテキストになる」というのはたまに言われますが、それも「時間をかける」をしまくるからなんじゃないか。具体的にいえば、僕

がふざける時間がちょっと（けっこう？）長くなるわけである。僕はいつだってふざけているが、ふだんはわりとヒットアンドアウェイでふざけている。ふざけてはもどし、ふざけてはもどし。いつでも動ける「忍者のポーズ」を基本とするわけ。しかし庚申の夜は、必要がなけりゃ戻さなくてもいいか、くらいの軽い気持ちでいるのだと思う。今日は時間がある、と思っているから。

たぶん、人にふざけさせる時間も長めにとっている。僕は時間を愛しているので、「今日は時間の動き方がいつもと違う、楽しい！」みたいなことをほんのり考えながら、長々と泳いでおります。

### ■三月十九日（木） ↓ i

17時から20時くらいまで僕の担当で、それから先はi氏。早い時間に「最近東京に来たばかり」という女性と、最近夕刻によくいらっしゃる方。でi氏到着。交代。

うまくやってくれくと願いながら退出。

### ■三月二〇日（金）

ゆっくりと時間が流れる。「存在への対価」の

文章を読んだ方から「お金のぶんだけ何か面白いことが起こるのがいいんじゃないか」と、ミッシェンポトルの亜種ともいえる「振る舞いポトル（仮称）」をご提案いただいた。これはこれで非常にすばらしいし、実際その申し出はたまにある。ちょうど今日（これ書いてる今現在は3月27日）

「8000円振り込むからポトル入れてくれ、若い人に飲ませてもいいから」とメッセージが届いた。本州の先っぽにお住まいの方。そういうのはもう本当に大歓迎、お金がないけど夜学に行きたい、という人はたぶんたくさんいるので。

こういうのはミッシェンポトルの流れとして（もうちょっと工夫を凝らしたうえで？）制度化してもいいかもしれない。アイディア募集中。それとは別に「存在への対価」は置いておきたい。「存在」という静的なものへの対価は成立しうるのか（またはどうしたら成立するのか）、という思索のための試みなので、もうちょっと寝かせてみたいのである。考えながら。

夜学パーは僕が立っている日でも25時くらいまでというようにしているので、「終電を逃す」と

いう人がそれなりに出てくる。このお店は良くも悪くも帰りにくく、帰りそびれる人は続出。でも「朝までなんとなくお店にいてもらう」ということは基本的にはない。タクシーやレンタル自転車で帰る人（お酒を飲まない人も多いお店なのだ）もいれば、どこかで時間を過ごしてから始発で帰る人もいる。何時間も歩いて帰る人もいる。そのあたりについて僕は原則として関知しないが、「どうしたらいいかわからない」という人にはもちろん相談に乗るし、ちょっとくらいはお店で話ししたりもする。

せっかくだから素敵な、もしくは有意義な時間の使い方をしてもらえたらと思う。考え事したり、夜の花を見たり。いろいろなところを覗いてみたり。安全には気をつかいつつ。そのように家に帰るまでが夜の学びであればとてもうれしい。

### ■三月二一日（土）

お客少なく、一対一でずいぶん長いこと話した。4〜5時間くらい経ってようやくやくのお客。ご兩名やがてお帰りになってぼーっとしてたら、0時くらいに二人組。

感染症流行の最中だが「この三連休は（みんな気を抜いて）街に人が増えている」ということになっていった。しかしこのお店はそうでもない。たぶんみんな、もっと「特別な場所」に行っていたのだろう。日常の場所をめざす夜学バーとしてはこれでいいのだという気もするが、それはつまり「日常が敗北した」ともいえない。

イベントよりも日常を、そして日常にはまず何よりも「健やかさ」を。すばらしき生活をしていきましよう。

### ■三月二二日（日）

昨日よりは人が多かったが、それなりという感じ。このくらいが自然でいいな。

就活中の若者がエントリーシートの内容について悩んでいたのでみんなであれこれ考える。社会に出たことのある人にとっては当たり前のことでも、その以前の学生にはまったく思い浮かばないようなことはたくさんある。専門的なことや明確に採用されやすくなるようなことは言えなくとも、そのくらいの貢献はこのお店にもできるようだ。皆様ありがとうございます。

全員お帰りになり、おかたづけをしていた0時55分、見知ったお客が扉を開けた。「どうぞ」と自然に声が出た。「どうぞせもうちよっと時間かかるので」と。作業しながら小一時間ほどお話をした。今日中に話したいことがあったようで、よかった。

### ■三月二三日（月）

就活に悩む人もいれば、転職が成功した人もおり、春という感じのこの頃。この日は近所に会社があつて帰りによく寄つてくださる方から「三月いっぱい退職する」とご報告をいただいた。環境を変えてもうちよっと働くとおっしゃるので「ぜひとも湯島で」と言うと、「このへんで探します」と。や、うれしいことだ。

三連休あまりお客がないなと思つていたら、なぜかこの月曜日に多かつた。やはり「日常の店」として存在できているのかな、とちよつと思つたがまあ誤差の範囲でしょう。

二日連続、25時ごろにお客が。お二人連れ。またほぼ反射的に「どうぞ」が出た。いろいろのあれこれ話した。現代詩がお好きらしいのでオス

スメをうかがう。自分が詩を書いていくせにあまり現代詩をよく知らない。近代詩ならそれなりに読むけど。こうしていろんなことを教えてもらえるのは本当にありがたい。

### ■三月二四日（火）

k

### ■三月二五日（水）

k

夜の開店前にちよつとだけ寄る。寸法を測つて本棚を注文した。この先はかなり暇になるだろうから、たつぷり時間は取れるだろう。4月1日で三周年、ようやくちよつとだけ模様替えます。やがてk氏来る。世間話する。18時ごろに退出。

### ■三月二六日（木）

k ↓ i

### ■三月二七日（金）

都知事が「週末の外出自粛を要請」した。近県もそれに倣つた。いろいろなお店の休業宣言がSNSにあふれた。夜学パーはさてどうするか？

僕は自転車で動くので、お店に来るぶんには感染するリスクもさせるリスクもほとんどない。と

りあえずお店には来た。いま27日金曜日21時15分だが、17時にいつも通りお店を開けて、ここまでいっさい来客なし。

水の減り具合や空き瓶の並びを見ると、僕の休んでいたこの三日間もお客は多くなかったと見える。従業員のみなさん、お店を守ってくれてありがとうございます、本当に。

たぶん今後しばらく、少なくともこの金土日くらは休業同然の売上（ひょっとしたらゼロかもしれない）だと思う。光熱費を考えたら閉めていたほうが経済的ですからあるかもしれない。僕だって休めるときに休んだほうがいいし、感染する・させるリスクは極力少ないほうがいい。

いまは扉をほんの少し開けて、換気扇を回して、ひざ掛けをして座ってこれを書いている。

いつもは17時すぎにツイッターへ「開店しました」と投稿しているのだが、今日はそれをしていない。しばらくしないでしょうと思う。昨年10月12日、戒厳令のようだった台風の夜もそうした。もちろん、固定ツイートや公式HPは常に最新。そこには今日も明日も明後日も営業日であると、ちゃんと書いてある。

あとからこれを読む人がいたら「今」がどんな雰囲気だったかも忘れちゃってるかもしれないけど、ずいぶんな様子なのだ。僕はおんもじゃなんにも言えませんが、humiのこのページは独立して自由、あーよかったなホームページがあって。

ツイートは「流れていく」ものだけど、humiは「強固にそこにある」もので、能動的に「見にくい」と思う人だけが見にくる。そこにあるのは「長い言葉」。しかも、まわりくどい。ふつうの人は「この文章」まで読みはしない。

こんなところまで読んでくれている人は、もし健康で気が向いたらお店に寄ってくださいれば、ほとんど僕と「サシ飲み」状態になると思います、たぶんしばらく。こんなところまで読んでくださる人ならば、きつと誰よりも深くよく考えて自分の行動を決めている人だと信じますので、大声上げず、静かにしつとりやりましょう。いろいろなことに気をつけながら。

《店はいつも未完了のまま待ちつつづけている。そのため、常に街に開いているのが店だ。入りやすさ入りにくさといった按配のみが、ぼんやりと



しかし適格に客を選ぶ。》(二十歳の浅羽通明「不可視大学論 序言」より)

お店は、ネット上における htm のホームページと同じように、「強固にそこにある」もの。そして、「入りやすさ入りにくさ」のみによって客を選び続ける。「どんなツイートをするか、しないか」も、その操作の一環としてある。「どういう客を選ぶか」が、それによりずいぶん異なってくる。いまはとりあえず「しない」を選択した上で、スケジュールだけをただ書き続けることにする。もちろん、方針はすぐに変わるかもしれない。それも含めて「操作」であり、「動きつづけてパランスをとる」ということ。

22時、まだお客はなし。飲み干したのは偶然に紅茶。静かに待ちます。

#### 【追記・22時以降の動き】

22時10分(開店から5時間以上経過)に本日最初の来客があり、それからぼつぼつ計四名。売上のことをいえば日々の目安に届くにはこの倍はな

いといけない。週末ということを考えると三倍くらいはほしいが、いずれにせよ「売上」ベースの思考をしている時ではないと思っっている。詳しくは明日以降の記事に。

#### ■三月二八日(土)

繰り返しになるけど家から自転車で行復しているのでお店に来るぶんには感染拡大にほぼ与していないはず。(「外出している人が一人増える」という事実には加担している。)

17時に開店。お客のなくとも文章を書いたり店の内部を整えたり、本を読んだりんだりしているので無駄と思うことはない。自宅が「母屋」で、お店は「離れ」のような感覚だ。といって常にかが扉を開けるかもしれないという緊張感はある家にいるよりはずいぶん疲れる。寝っ転がることもできないし。だから休みは本当に大事。四月以降はどうしようか。どうにかして休みを確保しようとは考えている。

昨日は5時間お客がなかったが、今日は17時半

くらいに來客。それから數時間二人きりだった。じつくりと話す。たぶんこれからこういう日々がずっと続くんだらう。なんて贅沢な時間！「売上ベースの思考」を廃し「関係ベースの思考」を中心にする、この状況も捨てたものではない。

そもそも夜学バーの経営方針は「ゆりかごから墓場まで」、生まれた瞬間にお店のことを好きになつてもらえれば、向こう八十年間顧客でいてもらえる、という信念（というか祈り）に基づく。もちろん來店頻度は時期により変わっていくだろうが、死ぬまでこのお店のことを忘れず、何年おきかでも来てもらえるような顧客づくりを心がけている。そのために「奨学生制度」という若く貧する者に利する仕組みはあるのだ。

「目先の売上」を見るのではなく、「一人のお客が年老いて死ぬまでにお店にもたらししてくれる利益の総和」を見る。利益というのはお金だけでなく、あらゆる角度からの利益。その人がずっと（何年おきかでも）通ってくれることそれ自身が楽しく嬉しいことならばそれはそのまま「利益」だし、その人が愛媛に引越してみかん農家になつてなかなか來店はできないけど毎年みかんを送つてく

れるならそれも嬉しく楽しい「利益」だし、その人が有名なピン芸人になつてテレビに舞台に引張りだこということでもなれば「アノコはねえ、むかしウチに通つてたんですよお、よく世話したもんですわあ」と言えるし、たまにお店に来て「いやー」とか言い合うこともできる、「利益」。

なんでもいい。なんでも「利益」。

この考え方でいえば「目先の売上」が立ちそうにもない現在ではむしろ「投資」の時期かもしれない。気をつけながら足を運んできてくれる少しの人たちとゆつくり話すことも、こうした長い文章を読んでもらうことも、「夜学バーは大丈夫だろうか」と心配してもらうことも、すべて先々の伏線にできる。だからとりあえず、なかばこっそりと店は開けている。

僕の体力的事情もあるので毎日同じ時間に開けるかはわからないけど、とにかくお店というものは「開いている」ことが大切である。誰にどんな事情があるかわからないのだ。特に夜学バーのような特殊なお店は「開いている」ということをあまり簡単に放棄したくない。すぐくたえば、

「いま誰かに会わなければおかしくなってしまう」という人がいて、その「誰か」というのが「あのお店にいる人」でなければならぬように思える場面はあるはずなのだ。それが「感染拡大のリスクを最小限に抑える努力をした上で」行われるのならば、今日この日に外出することを誰が責められようかと思うのである。そのお店は小さくて意外と風通しがよく、平時でさえそうそう混み合わず、大きな声をきらう店主（僕）が静かにリズムカルに切り盛りしている。

好きなお店がやっていることは嬉しい。駆け込めるお店が開いていると助かる。実際には駆け込まなくとも「開いている」ということ自体が心強さ、頼もしさ、安心感をくれる。お店というのはそういうものなんだと、いろんなお店のファンである立場から思う。

この日のお客は2名。売上は2800円。明日はもっと多いかもしれないが、0円かもしれない。お店の固定費は約15万円。でも僕は永井豪先生の『バイオレンス・ジャック』を小学生の頃に読んでいたのでこう言える。

「みんなイシをもて！」

戦う！ 負けるのはわかっているから…… 抵抗するっていうのかな…… こういうの……

おおい ムチャだ そんなの

ムチャでもやらにゃー

このままいつもおとなしくとられたら

いつまでたってもサカナはおれたちの口にはいらねー

きょうのサカナはとられるだろう

おまけにケガもするかもしれない

おっ

だが おれたちからサカナをとるのがひとくろうと知ったら いずれやつらはもっとラクにとれるところからとるようになる！

あしたもとられるだろう あさっても

だが いつか自分のサカナを食うために……

きょうを戦う！

みんな石をもて！

ゴ口 チェーンをめちやめちやにふりませ

気分はこれ。わりといつつも。

■三月二十九日（日）

横80cm・縦90cm・奥行22cmの本棚を買った。きのう届いて、きょう組み立てて設置した。ついでにいろいろ整理や掃除など。17時開店で2時半くらいに最初のお客。それからもう一人増え、しばらく経ってもう一人。みんな帰ったあとに後片付けして、せっかくだから25時くらいまでいようかと思ったらその3分前に来客。すごい。

「ジャッキーさん（僕のこと）は毎回ようすが違う」というようなことを言われた。それはたぶんけっこう意識しているところ。

僕は人によって態度を完全に変えている。それは当たり前のことだし、礼儀でさえあると思う。

学校の先生をやっているときだって、生徒Aへの態度と生徒Bへの態度は違った。

世間のイメージとして先生は「誰に対しても平等」であらねばならず、生徒によって対応を変えるなど言語道断、という考え方もあるようだが、僕はそうしなかった。それはもちろん「ひいき」や「差別」ではなくて、「一人ひとりと関係を作る」をやっていたら、自然にそうなっただけ。

基本的に、教員による「ひいき」や「差別」というのは、生徒を「分類」するところから始まる。「やりやすい生徒」と「やりづらい生徒」などと分けて扱う先生は多い。（僕にはそう見えた！）

お店の人も「すべてのお客に平等」を求められがちだけど、それをしたって誰も楽しくない。「すべてのお客に一人ひとり向き合う」ができれば、それに越したことはないと思う。「いいお客」「悪いお客」とか、「常連」か「新規」かとか、そのように人間をフォルダで管理するような分類をすると、いつのまにかすべての人に対してテンプレートで対応するようになってしまう。

嫌な教員っていろいろはたいいてい、生徒を分類し、それぞれにテンプレートで対応している。現場でよくみていたから、よくわかる。

生徒から相談を受ければ、「ああ、あの手の悩みね」と勝手に生徒の気持ちや事情を先取りし、「そういう時はネエ……」と優しく語り出す。そんな場面をけっこう見た。その内容は「すでに用意されているテンプレート」であり、過去にまっ

たく別の生徒に対して語られたものとはほぼ同一であらう。それが悲しくて寂しくて悔しくて生徒は泣き出すんだけど、教員のほうは「感動して感激して感謝して泣いている」と思い込んだりする。

お店に立つとき、お客の「分類」なんてしないほうがいい。ただ「関係」について考えるだけでいい。そしてその「関係」というものも、毎日同じではない。(『小学校には、パーくらいある』「学校、きてんじゃんか」の章、参照。)

さらに、ある人との「関係」は、その人と二人きりの時と、ほかに誰かがいるときで違う。その誰かが誰なのかによっても違う。その場にいる人の組み合わせによって、関係はきっちり変わる。組み合わせが同じであってさえ、無数の要因があって変わる。

夜学パーはそのようなことが自然(あたりまえ)であるような場をめざして、僕の言う「複数の人に同時に話しかける」というのは、そういう場を成り立たせる最低要件のようなもの。「一対一の会話」しかしないっていると、その閉じた関係は固定的になる。するとそこにいるほかの人は、すんなりと排除されてしまう。

少しわかりにくくなってきてしまったけど、わかってもらいたいのでもうちちょっと書いてみます。

バーテンダーがいて、カウンターに三人のお客がいる、とする。このとき、バーテンダーが客Aと「一対一の閉じた会話」をしていると、客Bと客Cはそこに入れない。同様に、バーテンダーが客Bと「一対一の閉じた会話」をしているとき、客Aと客Cはそこに入れない。

多くのバーテンダーはこのように、「客Aとの関係」「客Bとの関係」「客Cとの関係」と三つの関係を個別につくる。それらはすべて「固定的な関係」である。「バーテンダーと客Aとの関係」は出来上がっていて、崩したくない。この関係にとって客Bや客Cの存在はノイズである。

バーテンダーと客Aが話しているところへ、客Bが話しかけると、「バーテンダーと客Aとの関係」はいったん崩され、「バーテンダーと客Aと客Bとの関係」というちょっと複雑なものへと組み替えられなければならない。これを面倒に思う人は、けっこういる。

せっかく固定的で単純な「二人きりの関係」を

作れたのに、なぜ「三人の関係」という新しいものを作る面倒をわざわざ引き受けねばならないのか？ そう思う人はけっこう多くて、それを嫌うお店やお客はけっこうある。

バーやスナックといった小さな飲み屋においては、基本的に「一対一の閉じた関係」が好まれる。それが一番かんたんでトラブルが少ないからだと思う。しかしお店に通うことの醍醐味には「ほかのお客と関係を築く」というのもあろう。そのためにはどうするか？

「常連」という概念に頼るのである。

「バーテンダーと客Aとの関係」の中に、もしも客Bが入り込んできたら、どうするか？ このバーテンダーは、「客Aに対する態度」と「客Bに対する態度」とを分けている。「客Aとの関係」と「客Bとの関係」は彼にとってずいぶん違った種類のものなのである。不器用なバーテンダーは「三人の関係」の中でどのような態度をとっていいかわからない。「新しい態度」の構築が得意でないのだ。あらゆる関係性に合わせて態度を決めるには「無数の態度」が必要になるが、

その引き出しが彼にはない。

どうしよう？ かんたんなこと。「バーテンダーと常連の関係」として一本化してしまえばいい。つまり、客Aと客Bとをまとめて「常連」として分類（カテゴライズ）してしまえばいいのだ。そうすれば「常連に対する態度」と「常連でない人（たとえば新規とか初見と呼ばれる存在）に対する態度」の、大きく分けて二種類の態度さえ使えれば良いわけだ。

客Aがすでに「常連」で、客Bがそうでないとしたら、客Bを「常連」にしてしまえばいい。そうしたらバーテンダーは、「常連に接する時の態度」で客Aにも客Bにも接すればいい。同じ態度をとれる。なんの工夫もいらぬ。じつに楽。

その手順は、まず「客Bとの一対一の関係」の中で、「バーテンダーと常連の関係」をつくることから始まる。そのあとになってはじめて、「客Aと客B」とを同時に相手することができるようになる。どちらも「常連」なので、もう困らない。

「常連」という概念は、そういう利便性があって好まれているのだ。あまりに単純化した物言いに

聞こえるかもしれないが、本当にこういうふうなことは多い。かなり多くのお店に行つて、観察してきた上でそう思う。

同じ仕組みのことは社会のあちこちにある。

「一人ひとりと関係を作り、その組み合わせに応じて柔軟に態度をえらぶ」というのはそれなりの能力やキャパシティなど種々の条件が要求され、なかなか億劫なもの。だから「常連」とか「友達」「仲間」といった言葉でもつて、態度を一本化しようと努めるわけだ。

人を分類して、その分類に則つて態度を決定するという、効率的なやり方。

「常連」という概念は、お客を「分類」する。夜学バーはその道をとらない。ひたすら「関係」について考える。

あらゆる「関係」は毎日変化し、同じというとはない。しかも、ある人との関係は、その人と二人きりの時と、ほかに誰かがいるときで違う。

その「誰か」が誰なのかによつても違う。その場にいる組み合わせによつて、関係はきっちり変わる。組み合わせが同じであつてさえ、無数の要因

があつて変わる。ひたすら「関係」について考えるのは、かなり大変なことだ。

しかし、「常に新しい関係を作りつづける」ことを面倒くさがらない、というのが僕の積年のテーマであり、夜学バーの根本理念。三人で話しているところへ、新しい人が入つてきて四人になつたら、「三人の関係」はいつたん崩して、「四人の関係」を新しく作る。

もちろんそれは「新しい人がきたんで、もっかい自己紹介しましょうか」などという不自由な展開にしよつたというのではない。その四人めの人があつた話に参加するかどうかは、その人の自由なのだ。四人めの人、どのくらいの距離感でこの同じ場を共有するのか、というところから考え始めるのが、「新しく作る」ということである。決して「もともとあつた関係に入れてあげる」ではない。それこそ「常連の発想」であろう。

僕のように毎度違うように見えるのは、「その場」に応じて常に態度を変えているからだ、と思いたい。それが同じ人（同じお客の組み合わせ）であつても、座っている位置によつて変わつ

てくるだろうし、お互いのコンディションによってもめっきり変わる。「○○さんに接する時の態度はこう」とか「常連に対してはこう」「初めて来たお客に対してはこう」というふうに、あらかじめ決めておくことは何もない。毎日リセットして、新たにゼロから「関係」を考えつづけたい。

### ■三月三〇日（月）

支えられております。やや重なる時間はあったもののほぼ、サシノミ、サシノミ、二人連れと僕という三部構成。ゆったりできて良い、というのはもちろんながら、基本が一对一であると昨日書いたような「複数の人に同時に話しかける」は出番がないし、予想をこえた化学反応（この表現、もうちょっとカッコイイのないかなあ）も起こりにくい。どっちもバランスよくあると良いな。

少数数（とりわけ一対一）で同じ場にいると、やたら話が深まっていくことはある。この日とくに面白かったのは、ごく単純に言えば「生存」と「楽しさ」のバランスをどうとるか？ というようなこと。短い言葉ではなかなか表せないけど、

「生存を重視すると楽しさが減り、楽しさを重視すると生存が危ぶまれる」という傾向が世の中にはたぶんある。これをどうにか打ち破るか、あるいは飲み込んだうえでバランスよく両立させるか。僕はたぶん「楽しさを土台にして生存を掴み取るうとする」タイプ。逆の人もいるだろうし、ぜんぜん別って人もいると思う。

いま僕は土台たる「楽しさ」の上に立って神経を研ぎ澄ませ、「生存」のありかを見極めようとしている……みたいなカッコよさげな表現を考えてみたけどあんまりうまくないや。楽しさベースの人間にとって生存は当たり前のことではない。だからこそ誰よりも生存について真剣に考えなければならぬ。そして信じるのは、そういう人にこそ「生存の本質」がよく見えることだってあるということ。遊びの上手な人が、意外と勉強もできてしまうように。なにはともあれ、今現在めっちゃくちゃ「生存」のことを考えております。だって、そうじゃなかったら「楽しさ」が足元から崩れていってしまふ。（念のため、この「生存」というのは自分ひとりのことではないです。みんなのこと。）



■三月三十一日（火） ↓あすか

自肅要請のあとの四日間は、やはり閑散としたものの、思ったよりは来客があった。四人、二人、四人、四人（27金〜30月）。「こんな時こそ」と（諸々に気を付けつつ）来てくださったのだと思う。28日の売上が2800円だったというのはすでに書いたけど、それ以外の日は6〜8000円くらい。ぎりぎり家賃は払えるでしょう。（僕の収入はほぼゼロでしょう。）

本来は平均15000〜20000円くらいが望ましいので、金土を含んでこれはないへんつらい。といって、あまりお客が多くても感染リスク心配度が上がるので、しばらくは引きつづきそれなりのペースでゆったりやれれば。

（なんでこんなにお金のお話をするのかといえは、そりゃ単純に、気になりませんか。「経済的な打撃」がいかほどなものか、ということ。そして、あるお店はそれをどのようにとらえ、どう受け止め、どう動くのか、といったところを。）

そして今年度最後の31日。早い時間にお一人いらっしゃって数時間お話しする。そこにお一人。

先にいらっしゃった方帰る。そこにお一人。お一人帰る。交代予定の従業員あすか氏22時ごろ到着。もうお一人帰り、あすか氏と二人きりになってしばらく話す。お一人いらっしゃる。あすか氏にカウンター入ってもらおう。そこへもうお一人。23時すぎに僕帰る。そこから先はわからない。

お客五名とあすか氏で、わりと来客があった気はするものの、同時に店内にいたのは（従業員含め）三名が最大。いっときだけ四名の時があったが、そのタイミングで僕が退出。

今日はほぼずっと換気扇をつけて扉をやや開けていたが、ちよつと冷えた。あと少ししたら、常時換気にはできるはず。（「生存のことを考える」というのはこういうようなことです。）

たまに「常連さんが多いんですか？」とたずねられる。「初めてのお客」よりも「二度目以降のお客」のほうが割合として多いのは確かである。

（それはリピーターが多いという解釈でいいと思う。）ただ「初めてのお客」が週に何人か（多ければ十人とか）来ていることもまた確か。「夜学バーに行ったことのある人の数」は、着実に増え

続けております。

そんななか27日以降は「初めてのお客」が一人もいない。そりゃそうだろうという感じではある。もしのつびきならない理由や単純な好奇心などで夜学バーの様子を覗いてみたくなったら、ちょっと見学して「ありがとうございます、また今度きます」で誰も怒りはしません（むしろ面白がる）から、適当にご利用ください。

#### ■四月一日（水）

三周年！ ですが実は平成29年4月1日（土）の営業はお昼のさちあきさんにおまかせしたプレオープン、翌2日はなんとお休み（！）だったので、僕による営業初日は4月3日なのです。まだもう少し、内心のお祝いをぜひ。ちなみにその日は「庚申」の日で、朝まで営業した模様。

17時からいらっしやっただお客がお一人。しばらくしてもうお一人、やがて先のお一人お帰りになり、二人でだらりとし、もうお一人いらっしやり、先の方お帰りになり、二人で25時くらいまで。

夜のお客は計三名、でも8時間途切れずに人がいたのでさみしくはなかった。こんな状況だから

か、いろいろたのんでくださったのも助かります。経済的なお気遣いは無理のない範囲で。一杯で何時間いても構いません。（いいこにしててね。）

近所のお店、仲の良いお店が次々と休業している。挙げていったらきりがなくらい。

夜学バーは息をひそめて営業します。「何がなくても開けるんだ」という絶対のこだわりがあるわけでもないし、「あのお店はやっているから」と他所を見て決めているわけでもありません。最新の情報を眺めながら、自分にとって最善と思える行動をするのみ。

たとえば名前を出すのもあれだけど僕の心底愛する「高品質珈琲と名曲 私の隠れ家」とか「CURRY & BAR Ajiro」とかは、自分のペースでいつも通りお店を開けている。どちらも僕より少し年上のお姉さんが一人で切り盛りしている小さなお店で、喫煙可。中高年のお客も多い。その姿はむろん哲学であり、ほとんど詩のようである。なんと美しいのかと嘆息する。「その調子で続けてください」と言いたいわけではない。彼女たちの思うようにやるべきだ、とただ思う。彼女たち

の決めることであれば、彼女たちが美しい限り僕はすべてを賞賛する。(その後もこの二店は、いろいろ工夫しながら営業を続けている。)

今日は雨だったけど自転車にポンチョ合羽かぶせて来た。好きな喫茶店の前をわざわざ通ったりする。どこも平常通り営業していて、ちょっと心配になる。だけでもそれも美しさなのだ。

#### ■四月二日(木) ↓i

17時開店、1時間半くらいは文章を書いたりしていた。お客が一人お越しになる。「よかったらマスターも(一緒に飲みましょう)」的なことを言っていたのでごちそうになる。スナックや非オーセンティックバーではよくある光景。夜学バーはそういう制度を特別設けているわけではないが、僕個人としてはご厚意にはできるだけ甘んじることにしている。

i氏と交代し、i氏も「よかったらどうぞ」していただいていた。さらにそのあと来たお客も、i氏に「よかったらどうぞ」していた。i氏はジンのストレートなどを飲んで明日に備えていた。

夜の小さなお酒のお店にあまり慣れていない方にはピンとこないかもしれないので説明いたします。このやりとりは、「おいら(客)がそのぶんお金を出すのであなた(従業員)もお酒なりお茶なり飲んでいいですよ」という申し出に対し、「ありがたきしあわせ」と応じたわけ。ここで僕がビール飲んだとすれば、ビール代600万円がそのお客の勘定に記入される。コンセプトカフェ(メイド喫茶など)やガールズバーで「女の子ドリンク」等と呼ばれているシステムとほぼ同じ。

潔癖な夜学バーは小さな飲み屋にありがちな不文律に対してかなり慎重である。花見やバーベキューは絶対にしない。たくさん飲む人と少ししか飲まない人、アルコールを飲む人と飲まない人とのあいだにできるだけ差ができないように用心している。(お金をたくさん払えば偉いという雰囲気をつくらず、あまり飲まない人が過度に安くなるということもないように。)  
「常連」という概念を遠ざけ、顧客管理はしない。ライングループなど言語道断。SNSで「フォローワー」が表示

されることさえ歯がゆく思っている（が、フォロワーは必ずしも「お客」ではないし、広報の効果を考えると無視できるレベルなので容認）。なるべくお客を「分類」したくないのだ。

他の従業員にも「内輪ノリ」を避けるよう意思疎通してある。「有名な客」が存在してしまいうくらしいは自然だが、「そんでケンジが〜」とか「そしたらユミがさ〜」とか、ケンジもユミも知らない人の前で遠慮なく話すようなのはすっごく嫌なのだ。HPやツイートも、「お店に来たことがある人」と「ない人」の双方に同時に書いて書くよう努力している。すなわち、「複数の人に同時に話しかける」を、文章のうえでも意識している。

ただ「ボトルキーブ」と「マスターもどうぞ」に関しては一般的な酒場のシステムと変わらない。

ボトルキーブは「している客としていない客」を分類してんじゃないか、と言われたらその通り。けど今は「値段を気にせずたくさん飲めるシステムの確保」や「ボトルがある嬉しさや安心感」「来店欲の刺激」等々のメリットをひとまず優先

している。

利用者は10名程度で、ほとんどが従業員か来店頻度が月に一度未満の方。そもそもあまり使われていないし、ボトルもあまり目立った置き方をしていないから、とくに悪い（と僕が思うような）雰囲気は生じていないはず。ただ、運営していく中でもしも「ボトルキーブしていることに所属感やアイデンティティを感じすぎているケース」が目立ってきたら、廃止するかも。たぶん、そこまでの力はないけど。

「マスター（ないし従業員）もどうぞ」については、心配はあまりない。そもそも夜学バーは「奨学生」という概念を置き、「富める者から富まざる者へ」の富の再分配を是としている。僕やほかの従業員、あるいは夜学バーというお店そのものは基本的に「富まざる」存在なので、その行為、好意、厚意はありがたいばかり。お断りする理由はとくにありません。

「とくに富んでるわけじゃないけど一緒に飲んでほしいし、お店にも貢献したい」という気持ちも、ただひたすらにうれしい。それによってなにか特

別明確な「差」が生まれなければいい。妙な「返報性（お返しをしたくなる気持ち）」が生まれてしまい、従業員の気や目が狂ったらもちろんだめ。そうならないような一種の「サイコパスみ」を僕は持っているつもりなので、たぶん大丈夫です。（みんなも気を付けよう。）

「お酒をがちそうしてもらったから、行儀の悪いことをされても注意できない」みたいなのは最悪。逆にいえばそういう「目の曇り」みたいなのがまったくなかったら、なにも問題はない、というふうに考えております。「酒飲ませてやってんのにその態度はなんだ！」というような人はまずいないし、いたとしたら丁重にどうにかいたします。

#### ■四月三日（金）

17時開店、22時前くらいに来客。それまでの間は座って文章を書いていた。その後お一人、お一人で計三名。低空飛行で墜落はまだ。

未来についていろいろ話す。明るいばかりだったと思う。コンピュータを広げて黙々と作業をしている人もときおり息継ぎのように言葉を挟んでくれる。ゆっくりと時は過ぎていった。

#### ■四月四日（土）

土日は都から外出自粛要請が出ている。来客はほとんどなし。夜学バーのお客さんたち（まだ見ぬ潜在的なお客も含め）は、みんなまともな理性を持っている。今はそういう時なのだ。なめきつたり、開き直ったりする人はいない。

いま「外出」をするのは信号無視に似ている。覚悟と自信、そして何より「能力」がなければ、気軽に外出などできないはずだ。自身が感染する可能性、他者に感染させる可能性について頭をフル稼働させて考え尽くさなければ、（東京都内で外出をするのは）難しい。ただ、それを考え尽くしたうえでなら多少の外出は許されるというのが、たぶんこの社会の実情。人権だの自由だの、平等だのといった言葉は、そういうふうに人々を許す。

もちろん、外出している人たちみんなが「考え尽くして」いるのかといえば、たぶんそんなことはない。夜学バーはできれば「考え尽くす」人たちの場にしておきたい。「来てください」とも「来ないでください」とも言わず、ただ「考え尽くす」ということを是としたい。

「えい、遊びに行っちゃえ」という無責任さでも

なく、「とにかく外出しなければいけません」という思考停止でもなく。「自分にとって必要なことは何か」「世の中にとつて今すべきことは何か」を、しっかり、自分だけの立場から、ひたむきに考え尽くす。そういう人と、僕たちと僕はいつまでも仲良くしていきたい。

来客を減らしつつ、換気、消毒、距離感、話し方などに気を配る。そういったことが「考え尽くす」の一側面。往来はすべて自転車、買い物にはできるだけ行かず、業者から届いたものや紙幣は隔離して放置、ウィルスが不活性化するのを待つ。硬貨は洗う。とか。いくらでもやれることはあって、もはやそれが楽しくさえなりつつある。まさに「他流試合」そのもの。

従業員でもあるi氏やってきて、カクテルの練習などをして遊ぶ。おとなりのバーで「リモートバー」という試み（ズームというアプリを使った遠隔営業）をしていたので、徒歩2秒の距離でリモート参加。カクテルを遠隔で注文し、カクテルグラス持って取りに行く、なんてこともしてみた。

深夜、そのマスターが来店。「どうやってお店を持続させていくか」というのをわりと真剣に話す。もはや来店客だけを頼りにはできないな、という実感は僕にもあるけど、夜学バーの命は物理空間における「場」だし、美意識をあきらめる気もない。馴れ合いやコミュニティ化はもちろん全力で避け、「Web上に場をつくる」ということもたぶんやらない。

個人としてなら、やれることはあるかもしれない。Webでやるなら「お店」である必要はないのだ。お店はお店で、この世界の中にずっとあるようにしておきたい。（ご協力お願いします。）

#### ■四月五日（日）

早い時間、茨城の北のほうからご来店。都内とはやはり感覚がだいぶ違うようだった。

23時すぎ、お客なく、手持ち無沙汰だったのでズーム（ビデオ会議用アプリ）をインストールし個人のツイッターに会議室のURLを貼ってみた。するとすぐさま三郷市の「居るカフェ」店主と新潟市の「べがさす荘」店主が参加。はからずも店主鼎談となる。遅れて夜学従業員の某氏も参加。

やはり話題は「インターネット（とりわけ遠隔で会話するテクノロジー）をどう活用するか」。しばらく物理空間での収益はかなり限定されたものになるのは間違いない。とりわけ都内でテナントを借りている夜学バーは存続さえ危うい。何かアイデアのあるかたは、是非ともご一報を。

#### ■四月六日（月）

このお店はまだまる3年だけど、じつは12年前くらい（すごく若いとき！）から週一くらいペースでバーに立っている。その頃からのお客さんもけっこう来てくださる。本当にいろんな人たちが混じり合って、僕にとっては理想のお店となってきた。内輪ノリを防ぐには、みんなが別々になればいい。それぞれの違う人たちが融け合える垣塙があるとよい、というのは少なくとも15歳の時には明確に考えていた。

近所のお店の人もおいでになる。話しているうちに相手がなにか閃いたり領いたりする。そうして街がよくなっている。（正直にいえば、僕にとって快くなっていく。）そういうことが、世の中にお店がある意義の一つだと思う。

明日から時短にします。20時開店で、終わりはだいたい11時通り返り。ちょっと早めに帰るかも、つてくらい。しばらくやってみよう。

#### ■四月七日（火）

本日より20時からの時短営業。理由は主に体力の温存と、ほかの活動に充てる時間の確保。今のところは無休のつもり。

22時台にお客ひとり。今日はそれだけ。ゆっくりと時間は過ぎていく。帰りに少し湯島の街を散歩してみた。休業の貼り紙だらけの中、灯りのついた店舗がほんのまばらに。

外出自粛といわれるなか毎日のように外に出ていて、往復は自転車。街の様子がよく見える。寄り道はほぼしないけれども、たまに遠回りをしてみる。近所の喫茶店や食堂をぐるっと巡って、貼り紙などの異変がないかをチェックする。

繁華街のお店は「休業」「自粛」といった貼り紙だらけだったけど、住宅街のお店はほとんど何もなかった。たぶん明日からも平常営業なのだろう。好きな喫茶店をガラス窓から覗くと、かつてはなかったはずの消毒スプレーが置いてあるのが

みえた。そう、「止まっている」のではないのだ。「動いている」。

よく古い喫茶店などについて「時間が止まったような」という形容を見るが、実際そんなことはない。コーヒー豆もおしぼりも新しい。水道の水だって新しい。新聞や週刊誌はつねに最新のものが置いてある。カレンダーもめくられている。動いているのだ。感染症が流行れば消毒液だって置かれる。ともうれしくなった。生きている。

僕が好むようなお店の多くは高齢者が営んでいるか、通ってくる。もうずいぶん行っていない。寂しいが、異変があったらいつでも対応できるように（と言っても何ができるのか？）巡回している。そのくらいしかできない。アア。

また会えるといいなと、いろんな人やものごとに対して、ここんとこいつも思ってます。

#### ■四月八日（水）

時短二日目。20時開店。やはりとても静か。早い時間なら行くのだが、と黙ってくださっている方がいるとしたら申し訳ない。この出勤日数で、毎日8時間、お店に居続けるのは体力・気力を使

いすぎるのだ。

それで4〜5時間程度にしようと思ったとき、早く開けて早く閉めるか、遅く開けて遅く閉めるかを当然選ぶわけだけど、僕の性格上、いちどお店に入ったら結局いつもかなりの時間までお客を待たせよう。待ちながら、夜の終わりを迎えたくなるだろう。

夜をいつもより早く終わらせるというのは、なんとというか直観的に「違う」気がする。夜が好きなのだ。夜の特別さが。特別であればあるほど夜は輝く。幼き日の夜がどれだけ暗く、恐ろしく、輝いていたことか。藤子不二雄先生の『流血鬼』のラストシーンを思い出す。（名作、たった40ページ。お店で読めます。）目を凝らせば、明るさや優しさが滲みでるように見えてくる。

いまのこの夜の様子はまさに特別で、面白がる場合ではないが注視しておくべきではあると思う。僕らは今だけを生きるわけではなくて、ひょっとしたらあと50年でも100年でも生きる。見ておくものは見ておいて、考えることは考えておきたい。もちろん絶対、そのために今を死なないように。



## ■その後（四月二四日現在）

9日はi氏の担当で僕はお休み。その間にこの冊子を作り、10日20時からお店で売る、予定だったのが、14時からの都知事会見を見て作業停止。

夜学バーは「5時から20時までの時短営業（酒類提供は19時まで）」の要請対象となり、応じれば協力金として50万円いただけるということに。

11日、HPトップの「最新情報」に下記しるす。

## ●5月6日まで夜の営業は17〜20時

（お酒のラストオーダー20時）

●コーヒー（250cc）、ネーポン、クリームソーダなどソフトドリンクはすべてテイクアウトできます。同人誌や冊子などの販売（委託含む／新刊準備中）も続けています。テイクアウトや本の購入のみの場合は木戸銭いただきます。

●20時以降はテイクアウトと本の購入のみ可能です。片付けなどあるのでしばらくはお店にいると思います。ジャー報（03-5826-4750 / brat.yaga

ku星@gmail.com）いただければ少し遅い時間でも対応できるかもしれません。遠方の方や、タイミングの限られる方などは、ぜひ。

●テイクアウトを始めるのには理由があります。いま外出にはリスクが伴いますが、さまざまな理由で外出せざるを得ないことはあると思います。湯島・上野エリアに御用のある方もいらっしやるでしょう。

そのとき、せっかくだから夜学バーに行きたい、行ってみたいと思ってくださるのなら、ぜひともおいでくださいともちろん僕は言いたいです。しかし、まとまった時間を小さな空間の中で過ごし、その中で飲食をする（その際はマスクを外さざるを得ません）という行為にはもちろん相応のリスクが伴います。滞在が長ければ長いほど。また、人数が多ければ多いほど。

テイクアウトであれば滞在時間は短くなり、マスクを外す必要もなく、外で待つことさえできます。滞在するのは不安だけど「あいさつ」くらいはしたい、夜学バーというお店の雰囲気を一瞬だけでも垣間見たい、という方はきっといらっしや

る（いてくださる）と想像します。500円（木戸銭なし）からのテイクアウトは、そのために「ちょろい」機能を果たすはず。

また、「行ってみたいけどどのていどリスクがありそうな状態なのかわからない」という不安をお持ちの方が店内の様子を知るためにも、テイクアウトはちょろいと思います。

もちろん、「大変だろうから応援したいが、座ってドリンクを飲む余裕はない」という方も大歓迎いたします。烏龍茶でもオレンジジュースでも（あれば）お持ち帰りできます。「釣りはいらねえ」もいくらでも。

テイクアウトに限っては「20時まで」という要請にあてはまらないので、多少遅れて到着しても問題ありません。

個人的には、外出は「しないほうがいい」と思っています。世の中全体のリスクを適切にコントロールすることには「全面的に協力」したいという強い気持ちもあります。

ものすごく正直な話をしますと、お客がくればくるほど極地的にリスクが高まるわけですから、

以前のようにまとまった人数の人たちが入れ替わり立ち替わり、流動的に「場」を結んでいく、というような営業のあり方は望んでいません。ただせめて「あいさつ」くらいはできる場を確保しておきたいのです。これまでに来てくださった方も、初めてお目にかかる方も。そういった人たち同士でも。とりわけ、このような状況にあつてこのお店のことをちらりとも意識してください。ている方々とあらば。

おそらく、ある程度の割合の人たちに「息が詰まる」という気分があるでしょう。すでに、あるいはやがて。そういう人たちが、リスクとも経済とも離れて、「人と会う」ことで息抜きできるような場が、少しくらいはあったほうがいいと僕はいま信じています。病は気からとも言いますし。そのためにこのお店は（状況を見つつ）営業を続けていく予定です。

この方針で、現在も続けております。ここからおまけとして、9日以降の日報から抜粋を少々。

▼夜学バーは三階なので、一階に目印をいくつか置いてある。それらは今日、お店に仕舞った。あまり目立たず、「夜学バー」というお店に好意を寄せる人たちにだけ来てもらったほうがしばらくは無難なはず。それは「まだ来たことがないけど、こういう文章を読んで夜学バーの性格はあるていど知っている」という人も含みます。5月6日までに「初めて来ました」という人はどれだけあるだろうか。積極的に願うわけではないけど、「そんな人がいたら面白いな」と純粹に思う。

扉に貼り紙をしたり、マイナーチェンジはいろいろ。流動的に、変わることを恐れずに。それが「よき場」の本質と信じたい。(二一日)

▼好きな場所、いや「行ける場所」があるなら、そこを点としていろんな線が引ける。ぐにゃぐにゃでも線である。ぐにゃぐにゃな線を線たらしめるのは、たぶん強固な点である。(二二日)

▼いまこのお店に来てくださっている方々は、誰ひとり気軽には来ていないと思う。「最善手」として選択している。それがいつか自分を、周囲を、

世の中をよくするのだと信じている……はず。そうだといいな。

すべてはバランス。自分の気持ちをし和らげ、強めて、この店と僕たちに良いことをもたらす。結果として世の中全体をも利する。負の影響はごく最小限にとどめ、むしろ正の影響を多く生み出すよう努める。悪いことをおさえ、良いことをのばす。そしてみんなよくする。

「AとひきかえにBを得る」というのではなく、いろんなことを同時に、おさえたり、のぼしたりする。そいでバランスをとる。極端をきらう、中庸の態度。なんとも東洋的なこと。(一五日)

▼あてもなくお客を待つ、ある意味ではとても虚ろな時間が、時に詩的で心地よかったりする。常にはではない。基本的には孤独で寂寞としている。その時間が長く続くとランナーズハイのような状態がやってくる。「さみしんぼハイ」的な。それがもんのすごく诗情にあふれたものだったりする。文字の空気を吸っているかのように胸の内が詩で満たされる。などといったことを考えながら一人で座っております。(一六日)

## ■直近のこと

三時間営業となつて、お客はだいたい一〜三名。四名以上の来客は一日もなし。売上は雀の涙だけど、とにかく毎日開いている。

あまりたくさんのお客があつても困つてしまうけど、実際は一人か二人がほとんど。三、四人くらいだとちょうどいいんだけどな、とは思ふ。

でも今は、「人が来るか、来ないか」なんてことは本当にどうでもいい話なのだ。

「行く」という選択肢がみんなの手にある、というところが、たぶん何よりも大切。行かないけど、行くことができる。行こうと思えばいつでも行ける。希望というのは可能性の内にはかない。

お店が開いているだけで、「行く」という可能性が希望として灯る。閉まっていれば、可能性ごと閉ざされる。

いつでも会える親友とこそ、実際にはあまり会わないものだ。時に聞く。それはもちろん、いつでも会えるから。そう思えるほど安心できる相手だから。そのことを心強さとか、頼もしさというものとして、胸に灯して生きていく。人の強さというものは、そういう灯火のことなのだ。

いまお店を開けることや、外出することについては、いろんな人がいろんなことを思い、言う。僕は信念に基づいて、「可能性」の炎を絶やさぬようお店を開ける。そのために手を尽くす。

ストレスがたまっていたり、元気がなかったり、頭が狂いそうになっている人にとって、あるお店の存在が善く作用することはある。それがひいては、世の中を利することもある。

「行ける」可能性が残されていること、「気にする」を常にできること、そして実際、行くこと。そこで時間を過ごすこと。テイクアウトなら数分の滞在かもしれないけど、挨拶を交わすくらいはできる。それがけっこう大きな意味を持つ。

僕もときおり大好きなお店に（細心の注意を払って）行くんだけど、まったく、あんなに幸せな時間はない。身が詩で満ちる。人間を信じることや、希望を持つこと、「可能性の中から自分で選び取ること」の、かけがえなさ。愛ですな。

令和二年四月二十四日（金）